

# 研究の成果

## 夏まき年内どり栽培における「紀の輝」の施肥方法

### － 追肥重点で収量アップ！ －

#### 1. はじめに

実エンドウの新品種「紀の輝」は、早生で大莢の省力的な品種であり、特に、夏まき年内どりの作型で現地への普及・定着が進んでいます。しかし、その肥培管理技術は開発されておらず、早期確立への要望が高まっています。そこで、「紀の輝」の窒素吸収特性を把握するとともに、本品種に適した施肥方法を検討しました。

#### 2. 試験方法

表1に示すように、基肥と追肥の割合を変えた区を設けました。「紀の輝」を2005年9月1日には種し、追肥は開花始めから2週間おきに4回分施しました。対照品種として「きしゅううすい」を用い、同時期には種しました。

表1 施肥の処理区

処理区	基肥	追肥				合計
		I	II	III	IV	
追肥重点	5	3.75	3.75	3.75	3.75	20
慣行	10	2.5	2.5	2.5	2.5	20
基肥重点	15	1.25	1.25	1.25	1.25	20

数値はN成分(kg/10a).

基肥;FTE入り豆基肥(6-8-6), 追肥;千代田化成(15-14-9).

開花始め:「紀の輝」;10月2日, 「きしゅううすい」;10月14日.

表2 「紀の輝」および「きしゅううすい」の施肥法と収量、品質

品種	処理区 施肥	収量(kg/10a)				L莢率 <sup>Z</sup> (%)	むき実率 <sup>Y</sup> (%)
		11月	12月	1月	計		
「紀の輝」	追肥重点	302	331	108	741	78.4	47.7
	慣行	254	344	140	738	76.2	47.1
	基肥重点	146	295	198	639	73.9	44.5
「きしゅううすい」	慣行	203	356	113	672	67.3	50.0

「きしゅううすい」は、2℃で20日間の冷蔵処理した催芽種子を播種.

Z:L莢率=L莢収量/総収量×100(%).

L莢は、子実が4粒以上で極端な欠粒のない莢.

値は、収穫時期を通じての平均値.

Y:むき実率=子実の重量/莢全体の重量×100(%).

値は、収穫時期を通じての平均値.

#### 3. 試験結果

栽培期間の施肥量を一定にした場合、基肥を慣行より多くすると、生育初期の花落ちによる着莢率の低下が認められ、収量が減少しました。一方、基肥を慣行より少なくし、追肥を多くすると、総収量は慣行と同等で、初期収量が増加しました(表2)。

「紀の輝」は、「きしゅううすい」と比べて、L莢率は高くなりましたが、むき実率は低下しました。なお、基肥を多くするとL莢率およびむき実率は低くなり、逆に追肥を多くするとむき実率は慣行と同等で、L莢率は若干向上しました(表2)。

「紀の輝」は慣行の施肥において、栽培終了時までには10aあたり20.0kgの窒素を吸収し、同時期の「きしゅううすい」の吸収量より多い傾向が認められました(データ省略)。

#### 4. まとめ

「紀の輝」の夏まき年内どり作型では、慣行より基肥を少なくし、追肥に重点を置いた施肥でL莢率が高く、初期収量が多くなりました。

また、窒素吸収量は「きしゅううすい」に比べて各生育ステージで多いことがわかりました。

(園芸部 福嶋 総子)